

# 広島女学院大学総合研究所年報

〔電子版〕

Vol. 15



広島女学院大学総合研究所

2011

# I. はじめに

所長 柚木 靖史

本研究所は、広く人文・社会、自然の諸領域にわたる専門の学術理論及び応用に関する総合的な研究を行い、学術・文化の創造と発展に貢献すると共に地域社会の発展に寄与することを目的としている。

2010年度の広島女学院大学学術研究助成の交付件数は、「個人研究」11件、「共同研究」2件、「若手研究」0件、「萌芽研究」0件、「基盤研究」1件、「学術図書出版」1件、「学会特別助成」1件、「学術研究特別助成」2件だった。「若手研究」「萌芽研究」「基盤研究」の新規の公募については、規程改正により0件だった。

2010年度科学研究費補助金の採択は6件だった。ほかに、分担金の配分が2件あった。

『広島女学院大学論集』第60集は、創刊60周年記念号として12月に刊行され、関係諸機関に配布した。人文・社会科学分野が7編、共同研究6編を含め自然科学分野7編が掲載されている。紀要論文の電子化も著者の許諾を得て進み、広島県共同リポジトリ(HARP: Hiroshima Associated Repository Portal)を通して公開されている。

『広島女学院大学総合研究所叢書』第6号の発行は、執筆者の都合により見送りとなった。

本学公開セミナーは第28回目となり、本年度は、「現代の子どもを読み解く」というテーマで2010年10月9日、16日、23日、30日の各土曜日の14時から16時まで、人文館303教室で開催された。担当学科は幼児教育心理学科で、4名の教員が身近な例を取り上げてわかりやすく「現代の子ども」について講演を行った。本セミナーは、一般市民の方々と本学学生を対象とするもので、本年の参加者数は206名だった。1回あたりの平均参加者数は約96名で、延べ382名の方々が来場された。

学外との連携講座として、今年も牛田早稲田公民館と早稲田女性会との共催による「早稲田アカデミー」からの要請を受け、本学から講師を派遣した。テーマはさまざまな分野にわたり、5月から11月にわたって計6回開催され、参加者総数は88名だった。今年で7年目になり、参加者数も増え、地元、牛田地区との連携が深まりつつある。

財団法人「広島市ひと・まちネットワーク」によるシティカレッジ（於市民交流プラザ）では、英米言語文化学科の5名の教員が、「求める Search for Change」というテーマで5月から6月に講座（計5回）を開きました。延べ出席者数は95名だった。

また、財団法人「広島市ひと・まちネットワーク宇品公民館」主催の連携講座「広島で一番受けたい大学講座」（2010年10月10日土曜日 10時～11時30分 於宇品公民館）において、本学教員の中田美喜子准教授が「バーチャルで体験 世界遺産」という演題で講演した。48名の参加者があり、ほぼ定員を満たした。

さらに、財団法人「広島市ひと・まちネットワーク草津公民館」主催の2010年度市民アカデミーが草津公民館で計4回行われ、本学教員の森斌教授、佐藤茂樹教授、金田文雄教

授、宮本陽子教授がそれぞれの回を担当した。第1回目の演題と担当者、開催日時は、「大伴家持と雪月花」(森斌教授 2011年2月5日土曜日 10時～12時)、第2回目の演題と担当者、開催日時は、「小野小町の歌の『艶』と『惨』」(佐藤茂樹教授 2011年2月12日土曜日 10時～12時)、第3回目の演題と担当者、開催日時は、「忠臣蔵の世界」(金田文雄教授 2011年2月19日土曜日 10時～12時)、第4回目の演題と担当者、開催日時は、「夏目漱石『虞美人草』を読む」(宮本陽子教授 2011年2月26日土曜日 10時～12時)であった。参加者は、第1回が38名、第2回が33名、第3回が35名、第4回が34名で、合計140名であった。

本研究所に所属する特別専任研究員1名は、学習支援と図書館の機関リポジトリに関わる業務を担当した。なお、特別専任研究員の活動の詳細については、本年報「特別専任研究員の活動報告」をご参照いただきたい。

総合研究所は、上記のように本学教職員の研究活動の質的向上を目指し、そのための支援を行いつつ、さらには、地域との連携を一層深め活動している。本研究所が担う、学術研究支援という役割は今後も継続していく必要があるし、また、科学研究費等の公的資金の運用にあたっては、交付者に対して、より一層の厳格さを周知徹底させていく必要がある。そのためには、総合研究所の組織のあり方、職員の身分や配置、設備のあり方等について、学内論議を活発に行い、刻々と変化する社会情勢に適合したものにしていかなければならない。今後とも、本研究所の諸活動へのご理解とご支援を賜りたく、また、皆様方のご意見やご提言をお寄せいただきたい。

## Ⅱ．2010年度公開セミナー報告

『現代の子どもを読み解く』

### 幼児教育心理学科

2010年度（第28回）広島女学院大学公開セミナーは、『現代の子どもを読み解く』というテーマで2010年10月9日から10月30日までの毎週土曜日に計4回開催されました。

少子化が急速に進む現代にあって幼児期・児童期における教育の重要性が指摘されています。子どもたちを取り巻く社会が急激に変化していく中で、今の子どもたちに求められるものは何なのか、家庭や地域社会、教育・保育現場がなすべきことは何なのかを真剣に考える時期にあります。今年度の公開セミナーでは、今を生きる子どもたちが置かれている現状を分析し、そこに内在する問題をとらえながら、これからの幼児・児童教育のあり方を模索したいと思います。各セミナーでは、保育学、幼児教育実践、教育学、心理学の視点から子どもたちの姿を読み解いていきます。本セミナーの講義題目、担当者、および講義内容は次の通りです。

#### 第1回 10月9日（土）

子どもたちの生活環境と遊びの変容

幼児教育心理学科教授 石橋 由美

近年、都市化、核家族化、少子高齢化、国際化などに伴い、情報化・消費社会、格差社会へと急速に大きく変わってきた。家庭や地域における子どもたちの生活環境と遊びも大きく変化してきている。1990年代以降の保育教育実践は、このような子どもたちの生活環境の変化を見据え、子どもの育ちの現実に向き合ってきた。保育実践記録を手がかりに、現代の子どもたちの姿を読み解き、子どもの育ちを支える保育教育実践の課題を考える。

#### 第2回 10月16日（土）

今どきの親業 一人間の育ちを考える―

幼児教育心理学科教授 鈴木 道子

現代社会に生活している親御さんにとっては、子育てはさぞ大変なことと思う。自分が求めなくても居ながらにして、あふれるような情報が目、耳から入ってくる。その情報にふりまわされる日々であろう。40年間幼稚園現場で多くの子どもたちと出会ってきたこの日のセミナー担当者は、一人ひとりの子どもが人として育ってゆく為に、私たち大人にできることは何なのかを、経験を通しての思いを交えながら一緒に考えてみたい。

### 第3回 10月23日(土)

#### 「社会」の中で育つ子どもたち

幼児教育心理学科教授 松浦 正博

子どもが生まれ、育っていく過程＝社会化の過程において、社会的・文化的環境が不可欠であることは言うまでもない。例えば、家庭環境の重要性＝社会化の第一歩としての家庭におけるしつけの重要性についてはよく指摘されるが、そのあり方については、時代、地域、階層等により異なり単純ではない。本セミナーでは、今日、幼児期・児童期の子どもたちの社会化に求められるもの何か、また社会化はどのように行われているのか、そのことを子どもたちはどのように受け入れているのか等について考えてみたい。

### 第4回 10月30日(土)

#### “学び” からみた子どもの力

幼児教育心理学科教授 桐木 建始

私たち人間は生涯を通じて学び続けることを求められている。激しく変化する社会の中で常に新しい知識・技能を得ながら適応していく必要があるからである。認知心理学は、こうした適応する人間の知性のメカニズムを解明しようとしてきた。本セミナーでは、特に子どもの学びに焦点をあて、心理学の視点から“学ぶこと”の意味をとらえながら子どもの知性の深遠さ、素晴らしさについて考える。また、これからの教育が進むべき方向性についても考えてみたい。

# Ⅲ. 2009 年度広島女学院大学学術研究助成

## 【研究概要報告書】

### 〔個人研究〕

D. H. ロレンスから見たブロンテ姉妹—エミリを中心に—

文学部 英米言語文化学科 准教授 山内 理恵

#### 1. 研究目的と意義

D. H. ロレンスがエミリ・ブロンテと『嵐が丘』について関心を持ち、そのことが彼の創作活動に影響を及ぼしたことを証明するために、申請者が 2004 年から取り組み続けている一連の研究である。今まで英文学批評の中では重視されてこなかった二人の関係に焦点をあてることで、ロレンス文学の新しい読みの可能性を示す。

#### 2. 研究方法

D. H. ロレンスが作品、エッセイ、手紙、伝記などで残したエミリ・ブロンテと『嵐が丘』についての言及を拾い上げ、それぞれがどのようなニュアンスで言及されているかを探る。また、エミリ・ブロンテとシャーロット・ブロンテはひとまとめに扱われがちだが、ロレンスがエミリとシャーロットに対して持っていた感情の差異に注目し、「ブロンテ姉妹」とひとくくりに扱っていたのではないことを指摘する。そして、研究全体からロレンスのエミリ・ブロンテに対する感情を照らし出す。

#### 3. 研究経過

2010 年度は「D. H. ロレンス研究：ジェシー・チェインバーズとブロンテ像」を執筆した。本論では、ロレンスが彼の初恋の相手であるジェシー・チェインバーズをエミリ・ブロンテに似ていると言い肯定的な評価を与えながらも、最終的には彼女を否定する様子に着目し、その矛盾する言動の理由を考察すると同時に、彼にとってブロンテ像が持つ意味について考えた。

まず、「チェインバーズがブロンテと似ている」というロレンスの言葉の意味を解明するために、ブロンテに言及した彼のエッセイを分析し、彼がブロンテに抱くイメージを探った。次に、チェインバーズの回想を取り上げ、彼が彼女とブロンテとの「肯定的」な類似性を指摘しつつも、それを否定的な内容に変えて彼女を突き放す様子を指摘した。ロレンスの否定的なチェインバーズ像は、伝記の中のチェインバーズ像とズレを生じる。そのズレは、彼女がモデルと言われる『息子と恋人』のミリアムの描かれ方にも見られる。

チェインバーズはロレンスの母親リディアに似ていたという。母親に強い愛着と尊敬の念を抱いていたロレンスがそんなチェインバーズに惹かれ、親近感を持ったのも自然と思われる。一方で、彼女との交際を母親が否定したために彼は葛藤に陥った。また、道徳的な堅苦しさなど、彼が否定的に評価した母の側面をチェインバーズ自身が持っていたことも、彼が彼女を拒否する結果に繋がった。さらに、チェインバーズと母親との類似は、ロレンスに近親相姦の危険性を連想させた可能性もある。このように、チェインバーズに対するロレンスの矛盾する感情は、彼女が母親に似ていたことから生じた可能性を指摘した。最後に、ブロンテとチェインバーズの類似をロレンスが指摘していることと、チェインバーズと母親の類似を伝記が指摘していることから、母親とブロンテとの類似の可能性を指摘した。ロレンスが母親とブロンテを重ねていたとすれば、彼がブロンテに特別な感情を持つのも理解できる。ただし、この点については裏付けがないため、今後の研究でその証明が課題となる。

## 〔個人研究〕

### 日系グローバル企業におけるダイバーシティ・マネジメント

生活科学部 生活デザイン・情報学科 教授 篠原 収

#### 1. 研究の目的

ビジネス環境がグローバル化するとともに、「雇用のグローバル化」への対応が今後の日本企業、とりわけ海外へ生産拠点をシフトしている中堅メーカーにとって重要な課題となってきた。人材評価においても、国籍、民族、性別、年齢といった社会的要因によって類型化することの意味は薄らいできている。地球規模での「適材適所」の人材活用とともに、従業員同士がダイバーシティ（多様性）を要認、尊重しあえる企業文化を醸成することがグローバル化する日本企業にとっての優先課題といえよう。

一方で、日系グローバル企業はすでに 5 年前頃からダイバーシティ・マネジメントに積極的に取り組み始めており、多様な人的資源が持つ個々の能力を最大限に引き出すための経営戦略として、様々なダイバーシティ・デベロップメント・プログラムやダイバーシティ・トレーニングに取り組んできている。そうした実践と成果は、「雇用のグローバル化」への対応が迫られている中堅メーカーにとって、当面する課題への解決策を提示することとなると考えられる。

#### 2. 研究の経過

本年度は、7 月に「女性と仕事の未来館」を訪問し、女性労働の歴史や現状に関する情報収集し、東芝本社・人事部長から「グローバル採用」に関するヒアリングを実施することができた。また、3 月には「高度外国人材活用セミナー」に参加し、シンポジストであったブラザー工業・人事部課長に取材協力の申し出をすることができた。他には、東京において労働政策フォーラムに 2 回参加するとともに、ダイバーシティ関連図書などを収集することができた。

#### 3. 研究成果

篠原 収「Current Conditions of Women's Employment and Labor」、「Transitions in Policies Geared to Women」JICA（国際協力機構）アフリカ女性リーダー研修 ひろしま国際センター（東広島市）2010 年 8 月 13 日



## 〔個人研究〕

### スクランブリング・フォーカス・トピックに関する通言語的統語的研究

文学部 英米言語文化学科 教授 中村 浩一郎

#### 1. 研究の目的

日本語のスクランブリング操作を、フォーカスに駆動される義務的な操作であるととらえ、それが世界の諸言語のフォーカス移動とどのような関連があるか、を精査することを目的とする。更に、助詞「は」の示す意味機能を考察することも目的とする。

#### 2. 研究の概要

本年度は、次の2つに焦点を絞った。1つ目は、日本語の助詞「は」でマークされる句の意味・機能を3つに分類し、その統語上の位置を Rizzi (1997) など提唱される cartographic approach をもとに分析することである。2つ目は、トピック、フォーカス移動を、それぞれトピック素性、フォーカス素性に駆動される義務的な移動である、と主張することである。

まず、助詞「は」について述べたい。Kuno (1973) 以来、「は」は主題と対照の2種類を示すと考えられている。しかし、Yanagida (1995) が主張するように、強勢を受ける「は」は、フォーカスとしてとらえるのがより自然な分析である。更に、スクランブリングされた句とフォーカスを示し、強勢を受ける「は」で示される句が共起することが難しいことをふまえると、「は」には主題(Thematic Topic, TT)、対照主題(Contrastive Topic, CT)に加えて、対照焦点(Contrastive Focus (CF) という3種類をマークする機能がある、と主張できる。

また、「は」で示されるトピックは、トピック素性に駆動される操作であり、「は」で示される句、あるいはスクランブリング操作の適用を受ける句は、フォーカス素性に駆動される義務的な移動である、と主張することができる。

このような日本語のトピック・フォーカス操作について、以下に挙げる学会出研究発表を行い、学会誌にも論文が掲載された。

次年度の課題は、トピック・フォーカス構造について、ハンガリー語、イタリア語、あるいはペルシャ語以外の言語のデータを検証することと、vP 内部のフォーカス構造について更なる研究を進めることである。

#### 3. 研究成果の公表

##### 3.1 論文

(1) “Wa-marked topicalization triggered by topic feature and object scrambling triggered by focus feature,” 2010年8月 *Proceedings of the 12<sup>th</sup> Seoul International Conference on generative Grammar: Movement in Minimalism*, 361-372. (Hankuk Publishing Co.発行)

##### 3.2 口頭発表

(1) 「Contrastive topic-marker としての「は」とスクランブリングとトピック、フォーカス投射」 2010年7月神田外語大学 CLS 10周年記念言語学講演会・研究会：『70年代日本語生成文法再認識—久野すすむ先生と井上和子先生を囲んで—』 於神田外語大学

- (2) 「*Wa*-marked topicalization triggered by topic feature and object scrambling triggered by focus feature」 2010年8月 12th Seoul International Conference on Generative Grammar: Konkuk University, Seoul, South Korea.

## 〔個人研究〕

### 高大連携授業における遠隔講義の役割

生活科学部 生活デザイン・情報学科 准教授 中田 美喜子

#### はじめに

現在、遠隔講義についての技術は日々進歩している。特にインターネットを利用した遠隔講義やeラーニングについては大学において実際に単位取得科目に採用され、少人数教育や欠席対応および補助的な教育として実施されている。しかし高等学校や大学・高等学校間での高大連携、出張講義などに利用されている例は少なく、内容も生徒への配信も今後の検討が必要である。そこで本申請では、広島県の県北にある高校とインターネット経由で高大連携授業を開講し、生徒の受講や高等学校教員の取り組みおよび大学での配信内容について検討し、今後の高大連携講座において、効果的な高大連携授業の開講を目的として本研究を実施する。

#### 方法

2010年では、高等学校のカリキュラムに含めて実施してくるように組み込みが可能であった。

講義方法については、以下の条件で行うこととした。

- 資料はプレゼン用ソフトで作成して、大学から高校側へ配信しながら講義する
- 講義時間は45分 高校の授業時間なので短くまとめる
- 手持ち資料が必要であれば事前にメールで送付しておく
- 大学側の設備 カメラ、コンピュータ2台、マイクスピーカ
- 高校側の設備 カメラ、コンピュータ1台、マイクスピーカ（図1）

授業については、高校・大学両方へ技術サポートの人員を各1名配置して機材を設置した。福祉関連の講義、経済関連講義、世界遺産関連講義、哲学関連講義など2010年前期には、9科目を4高校へ配信している。

授業終了後、高校側教員、生徒にアンケート調査を実施した。また授業を実施した大学教員にもアンケートを実施した。



図1 高校側授業風景

#### 結果

高校生へのアンケート調査の結果、すべての生徒は、今までに遠隔授業を受けた経験がない生徒であった。「遠隔地で授業してもらうことに抵抗がありますか」は思わない、やや思わないで80%、「遠隔授業に興味がありますか」は思う、やや思うで78.3%であった。

さらに「1 学期の授業の中で数回なら遠隔授業が入ってもよいですか」では、思う、やや思うが 79.5%であった。

質問項目の「通常の授業と大差なく無理なく遠隔授業を受けることができましたか」はよくできた、できたが 68.1%であった。「あなたはこの授業の内容を理解できましたか」では、97.9%の生徒が理解できた、ほとんど理解できたと回答した。「今回の授業は将来の進路の選択に役に立ちそうですか」では、91.5%の生徒が大変役に立ちそう、少し役に立ちそうと回答した。

自由記述について、「思ったより良く、近くに先生がいるようだった。」「楽しかった」「普通の授業とかわりなかった」など肯定的な回答が多く認められた。また、「コミュニケーションがとりづらい」といった回答も数名あげられていた。

高校教員へのアンケートでは、「音声は明瞭に聞こえましたか」よく聞こえた、聞こえたで 100%、「映像は鮮明に見えましたか」は良く見えた、見えたで 100%、「通常の授業と大差なく、生徒が本授業を受けていたように思われましたか」は思う、やや思うで 100%の回答が得られた。

大学教員によるアンケートでは、「技術の進歩に感心した」「大学構内で授業ができるので時間の節約になる」などの好意的感想が示された。さらに「パワーポイントだけによる授業に限界を感じる」「高校生の反応が分かりづらい」という批判的な感想も得られている。特に「人手も機材もかかるのでこのような授業は大変」といった問題点も指摘された。

## まとめ

高大連携による遠隔授業の結果、高校生は興味深く授業を受けてもらえることが可能であった。また、今回は文科系の科目がほとんどであったため、高校からも理系の科目が受講したいという要望があり、今後も高大連携の授業を継続していくことが必要であることが認められた。

広島県備北地区においては、接続テストをして県立高校のインターネット回線が遅いことで、別に回線を接続した。また光ケーブルの届かない地区もあり、インターネットそのもののインフラに地域格差があることが認められた。今後は、インフラ整備の必要性を訴えていくとともに、過疎地域への連携も含めて検討をしていく必要があると思われる。

## 〔個人研究〕

### 幼児と保護者における身体活動量の関連性 ー幼児の身体活動向上のための支援へ向けてー

文学部 幼児教育心理学科 講師 田中 沙織

#### 1. 研究目的と意義

本研究では、幼児を持つ保護者とその子どもの生活リズムおよび身体活動量に焦点をあて、保護者と幼児の身体活動量の関連性を検討することで、幼児の身体活動量減少の要因並びに幼児の身体活動向上に向けた支援を探ることを目的とする。

そのための研究内容として、保護者と幼児の身体活動量測定と生活リズムの記録を同時期に行う。幼児と保護者の身体活動の関連性に関して科学的調査法を用いた先行研究の蓄積は十分になされていないため、身体活動の基礎的データが得られる意義は大きい。また、近年の社会状況から、保護者が子育てに対して割ける時間が減少する傾向にある中、本研究の成果によって保護者のどのような行動が幼児の身体活動を向上させるかが明らかになれば、保護者に対するインプリケーションは価値のあるものとなる。

#### 2. 研究方法

- 1) F 県の保育所に通う幼児 15 名とその保護者 15 名（保護者は 15 組とも母親）を調査対象とし、幼児の生活リズムに関するアンケート、及び母親の生活リズムと運動に関する意識についてアンケート調査を行なう。
- 2) 小型加速度計（Kenz 社製 LifecorderGS）を用いて、保護者と幼児の身体活動を同時期に測定する。身体活動の分析には Lifecorder GS 用解析ソフト Lifelyzer05 Coach を使用し、期間中の身体活動量、活動時間、消費カロリー、運動強度の側面から検討する（調査期間は 2010 年 7 月）。

#### 3. 研究経過

- 1) 週 5 日以上動的遊びを行なう子どもの母親は、週に 3 - 4 日の動的遊びを行なう子どもの母親と比較して、休日の身体活動量が有意に高かった。また、その身体活動の強度は歩行運動程度であり、強度の高い身体活動でなくとも休日に身体活動を行なっていることが幼児の平日の身体活動と関連性があることが明らかとなった。さらに、親子で身体活動を行なう習慣が確立されていれば、子どもの日常的な運動を習慣化できる可能性が示唆された。
- 2) 「母親の平日の活動時間と母親の休日の活動時間」、「子どもの平日の総消費カロリーと子どもの休日の総消費カロリー」、「母親の休日の活動時間と子どもの休日の活動時間」には正の相関が確認された。これらから、母親も子どもも平日と休日における身体活動量には関連性が見られた。その上、母親の休日の活動時間は子どもの活動時間と相

関があることから、日頃から身近な大人が一定程度の身体活動を行なっていることが重要であると考えられる。とはいえ、本研究では生活に密着したデータを収集するため被験者数が少数であり、今後は被験者を増やしながら具体的な支援に向けたさらなる検討がなされる必要がある。

## 〔個人研究〕

### 意思決定のためのコミュニケーション ーフィンランド女性の社会参画を中心としてー

生活科学部 生活デザイン・情報学科 教授 石井 三恵

#### 1. 研究目的と意義

男女共同参画社会をより推進・拡大していくためには、個人差はあるが、その教育ならびに訓練の方法を定着させる必要がある。つまり、現代社会においてジェンダー差が解消されていない現実を理解する一方で、女性自身にも自己理解を促進させ、ライフスタイルの自己選択の幅を拡大し、自己決定することによる自己責任を取ることまでの一連のあり方を理解させるプログラムも必要になってくる。

2005 年から、フィンランドの初等・中等教育の変遷、女性のライフスタイルの変化にともなう社会の変化を中心に研究を重ねてきた。日本と比較するとはるかにジェンダー差が少ないフィンランドにおいても、ジェンダー差のすべてが解消されているわけではない。女性参政権を世界でも早い時期に認めた国であり、現在も大統領を初めとして、政治的中枢に女性が位置しているフィンランドでさえも、女性への暴力が絶えることはない。

しかしながら、発言力の高いフィンランド女性だからこそ、センシティブな問題に対して発言することで暴力を明るみに出し、課題を示していると考えられる。ここに、社会へ参画していく女性のコミュニケーションのあり方を検証することができる。

#### 2. 研究方法

- 1) フィンランド女性への暴力の実態を統計から検討する。
- 2) 女性の進学率が高い高等教育において、とくに 2009 年に統合され、新たな出発を掲げたアアルト大学に焦点を当て、そのカリキュラムを検討し、コミュニケーションのあり方を検証する。

#### 3. 研究経過

- 1) センシティブな問題であり、統計からは想像つかないことも多く、教育関係者にインタビューを試みた。この問題に関しては、どのような社会システム世界をもつ国や地域においても、実態はほとんど変わらないことも理解できた。
- 2) 工科大学、芸術大学、ビジネス系大学の 3 つの大学統合によるアアルト大学は、伝統的な教育および教養教育が主体となるヘルシンキ大学と比較すると、新しいビジネスの方向性やそのための教育のあり方を模索していることがわかる。学長をはじめ主要なポストに女性を起用しており、PBL (Problem based Learning) から IDBM (International Design Business Management) と明確にビジネスの概念を打ち出している点が特徴である。このビジネスの概念にはコミュニケーションによる人間関係構築が必至であり、その新しい視点を女性教育者が強調しているところは興味深い。しかしながら、そのプロジェクトはまだ模索状況であり、いくつかの成功例を示しているが、今後の注目に値するといえよう。

〔個人研究〕

Western Women Write about Meiji Japan

文学部 英米言語文化学科 教授 Ronald D. Klein

This research project has identified, collected and begun to analyze more than 300 books and articles written by Western women (USA and Great Britain) about Japan during the Meiji era (1868-1912). This proposal was part of a five-year research project. The first part of the project was to identify and obtain the texts, creating the bibliography. The second part has been to summarize these books by putting them into categories—travelers, missionaries, other sojourners, teachers and fictionists. The third part will construct an annotated bibliography with lengthy introductions to each part. The final result will be a book-length annotated bibliography, *Adventurers, Sojourners and Armchair Travelers: Western Women Write about Meiji Japan* in 2013.

In the second year of this research grant, I continued to identify, purchase or copy books. Since most of these books were published more than 100 years ago, the preliminary task has entailed a worldwide search in used book sources (Amazon, Alibris, Abebooks), Internet sources (Open Library) and using HJU's Inter Library Loan system to borrow and copy texts.

In the summer of 2010, I returned to the British Library in London, where I had located five books that have been out of print for more than 100 years. The Rare Books Library staff was helpful in allowing me to copy the complete texts, which is against their normal procedure for preservation of old books. The New York Public Library had one book, which no one else had. Internet searches have provided much background information about many of these writers. In December I also went to Doshisha University to look through the archives of Mary Denton, a long-term missionary there.

Since the first section on women travelers has been completed, the main focus of the second year has been a broad study of missionary movements in Japan. History of the various religious denominations who came to Japan in the 1860s, 1870s and 1880s is a necessary context of the women missionaries who wrote about their experiences.

A background article, "Travel Writing from Post-Perry Japan: Visitors, Residents and Globetrotters" was published in HJU's *Studies of English Literature and Language* (Vol. 18). A second article, "Western Women Tourists to Meiji Japan" was published in the *HJU Graduate School Bulletin*.



## 〔個人研究〕

### テレビニュースと取材の談話の構造の比較分析

文学部 日本語日本文学科 准教授 大場 美和子

#### 1. 研究の目的

本研究の目的は、「専門家」に対するテレビ局の取材時のインタビューのやりとりが、編集されてテレビニュースに引用された結果、いかに取材時の実際の文脈を離れてテレビ局側の「現実」として構成されているのかについて、取材の談話とテレビニュースの談話を比較することによって明らかにするものである。従来の研究では、放送された番組間の比較によって、メディアが独自の様式で現実を構成する実態を指摘するものが多い。本研究では、大学教員が「専門家」として実際に取材を受けた場面の録音・録画データと、その取材が編集されて放送されたテレビニュースの録画データ、という 2 つの談話を比較する点に特徴がある。さらにこの分析結果を、マスメディアによる情報を批判的に見るメディアリテラシーの教育として扱い、教育と研究の連携を目指すものである。

#### 2. 研究方法

2010 年度は、取材の談話における話題と質問の分析を中心に行った。取材の談話とは、筆者が地元の民放局から「国語に関する世論調査」について「専門家」の解説を求められ、研究室で約 2 時間にわたって行われたインタビューの録音・録画である（2008 年 7 月 30 日）。分析では、取材の談話の話題区分を行い、37 の話題別に、取材者と専門家の質問（情報要求、同意確認要求、その他）を集計した。

#### 3. 研究経過

分析の結果としては、取材という制度的談話として期待されるやりとりから 2 つの逸脱の発生を指摘した。1 点目は、取材者だけでなく専門家も質問を多く行っており、専門家の逆質問で取材者と専門家の役割関係が逆転する現象が発生する点である。2 点目は、表面上は質問と情報提供のやりとりをしているようでありながら、単純な隣接応答ペアではなく、内容にも一貫性がみられないことがある点である。専門家の解説の収録という目的達成のため、取材の談話として期待される役割と相互行為からは逸脱が発生し、その逸脱のプロセスから「専門家」の「解説」が構成され、「テレビニュース」として放送されたといえる点を明らかにした。

分析内容は、2010 年度後期の社会言語学Ⅱの授業においてメディアリテラシーの一例として扱った。また、社会言語科学会第 27 回大会（2011 年 3 月 19・20 日、於・桜美林大学）において本研究課題の成果の一部について発表を行う予定であったが、東北地方太平洋沖地震のため大会が中止となった。研究発表は、発表が許可され大会発表論文集に掲載されたことをもって発表を行ったものと同等にみなすという特別措置がとられた。

## 〔個人研究〕

### 伝統的装束の使用実態から見る意義と伝承に関する研究

生活科学部 生活デザイン・情報学科 専任講師 檜崎 久美子

#### 1. 研究目的と意義

本研究では、現代社会における神道文化を基盤とした祭礼に用いられる伝統的装束の活用実態を調査することで、その意義を解き明かしていくことを目的とする。同時に伝統的装束の存続について、実態を踏まえた上で今後の伝統文化継承についての提案も行っていく。

#### 2. 研究の方法

- ① 伝統的装束の成立過程の文献調査
- ② 伝統的装束の使用実態の調査
- ③ 伝統的装束の着用者および観覧者への意識調査

#### 3. 研究経過

2010 年度においてはまず、昨年度収集した調査票の整理、分析を主に行った。

神職及び神職関係者における伝統的装束の名称や構成、素材などの認識は高くなく、舞や神事を行うために必要な「道具」であるという感覚が強い傾向が表れた。また、サークル活動のユニフォームとしての伝統的装束を用いる学生にとっても同様の結果が見られた。

ただし、日本の伝統文化との深いつながりと、観覧者から「聖なる存在」として見られているという意識が、伝統的装束を着用することによって得られるという特殊な心理が見られたことは他の衣装にはない効果として特筆に値する。

また、昨年度の課題であった観覧者に対する意識調査データの不足については、今年度の主専攻セミナーⅡの授業において、芸術文化に関心のある学生に神社庁から発行されている祭祀舞の DVD 鑑賞をさせたのち、意識調査を行い、データの補完を行った。これについては、今後も継続してデータの収集を行うことにより、若年層の伝統的行事の意識について比較・研究を深めたい。

また、伝統的装束の成立過程の研究として、2011 年 2 月 27 日に春日大社文化講座「女房装束とその歴史」に参加し、今なお伝統的装束を日常使用している環境における装束の歴史についての解釈を学ぶ機会を得た。

## [個人研究]

### 幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的効果について

文学部 幼児教育心理学科 准教授 三桝 正典

#### 1. 研究目的

本研究は、幼児期に美術館において美術作品の鑑賞活動を行い、そこから色々な新しい発見や発想などを創り出す鑑賞学習を手がかりとして、心理的な側面から幼児がもつ創造的な思考や表現力などを培うことにより、よりスムーズな幼稚園・保育園教育と小学校教育との接続・連携をはかることを目的とするものである

#### 2. 研究方法

幼児期の鑑賞教育の現状把握、分析を行い、2年間を通し、美術館（ひろしま美術館）での鑑賞授業実践を行い、収集資料や実践データの分析・まとめを行った。

#### 3. 研究過程

ひろしま美術館における鑑賞授業実践

【2009 年度】                      2009 年 6 月 9 日（火）聖モニカ幼稚園 年長園児約 50 名  
   2009 年 7 月 17 日（金）ゲーンズ幼稚園 年長園児約 70 名  
マイヨール作のブロンズ像を色々な角度から見て、感じたことを一人ひとりの個人パネルに描いていく活動を行った

授業実践の詳細は、広島女学院大学論集第 59 集（pp.31-45）

【2010 年度】                      2010 年 6 月 4 日（金）聖モニカ幼稚園 年長園児約 50 名  
   2010 年 7 月 16 日（金）ゲーンズ幼稚園 年長園児約 80 名  
ゴッホ「ドービニーの庭」・ルドン「青い花瓶の花」を見て、絵から感じる「続き絵」を大きなパネルにみんなで描いていく活動を行った。

授業実践の詳細は、広島女学院大学論集第 60 集（pp.43-55）

2009 年度の実践は、見た作品を「模写」する活動が中心であったが、2010 年度は、模写する活動に「続き絵」を描く活動を加えて実施した。園児は、実物の絵からその続き絵を描いていくという経験は、ほとんどなかったが、実際に園児が美術館で描いている時の「早く描きたい！」「もう 1 回絵を見に行ってから描いてもいい？」「お花好きだから絶対お花の続きを描く」などの様子やその時描いた作品、またその後の幼稚園に帰った後の「お弁当食べたら、また描きたい！」「ゴッホの絵教えてあげるよ」「続き絵お絵かきだい 2 弾！」などから、子どもたちが実践した美術館での鑑賞授業は、様々な心理的効果をもたらすことができたのではないかと考えられた。今後も引き続き美術館での鑑賞活動の実践を継続し、様々な鑑賞教材とその鑑賞方法を工夫しながら幼児の心理的効果について引き続き研究を続けていきたいと考える。

## 〔個人研究〕

メロドラマが育てた近代国民国家日本（新聞小説作家としての紅葉から漱石まで）

文学部 人間・社会文化学科 教授 宮本陽子

### 1. 研究目的と意義

多くの小説作品が雑誌連載、あるいは書き下ろしで本の形で出版されることが今日では当たり前であるが、明治期において、小説作品のほとんどが新聞小説として連載されてから書籍になっていた。新聞の創成期であった明治において、新聞は近代国家に相応しい国民を作るメディアとして政府からも国民からも認識されていた。そこにおいて連載されていた新聞小説も当然、作家たちの誇りと読者の期待を担うものであった。

数ある新聞小説のなかから、最大のベストセラーであった尾崎紅葉の『金色夜叉』と夏目漱石の『虞美人草』を新聞小説という媒体を考慮しながら解読することで、近代国民国家という共同体の意識を考察したい。

### 2. 研究方法

- 1) 1年目は作者の病気と異常な人気によって、複雑な発表形態をとりながらも、内容は単純であった『金色夜叉』の受容について考察した。
- 2) 2年目は大学教員を辞め、文筆家として身を立てることにした漱石の最初の新聞小説『虞美人草』を分析した。

### 3. 研究経過

『金色夜叉』については昨年の報告書に書いたとおりである。

『虞美人草』は漱石の作品のなかでもっと毀誉褒貶を激しく受けた作品である。原因は正宗白鳥の批判に見られるように、この作品に書かれた言葉を字義通りに解釈し、凝り過ぎの文体で書かれた勧善懲悪小説と評価にあるようだ。しかし、近年は、人物たちの言葉に翻弄されることなく、時代背景を深く読みとることで、漱石の政治批判、社会批判に裏打ちされた作品であるという再評価がなされている。

また、主人公の藤尾に対しても、漱石が弟子に否定的に語った手紙を受けて、批判的に読まれた時期もあったが、詳細に読むと、ここで対比されている、古いもの／新しいもの、東洋／西洋、男と男の世界／男と女の世界、という対立のなかで、藤尾が象徴する後者の対立項に軍配が上がりてしまうのを否めない。

以上のような内容を以って、『広島女学院大学 言語文化論叢』第14号に論文として掲載すると同時に近隣の公民館で行われる市民を対象とした講座で研究成果を公開している。

## 〔共同研究〕

### 建築家の思索にみる生活世界のつきつめ方

生活科学部 生活デザイン・情報学科 准教授 小野 育雄

#### 1. 研究の目的および意義

現代建築が根づいてきた思潮のなかにあつて、空間を建築課題の中心に初めて見据えたのは、ブルーノ・ゼーヴィ（1948 年の書）やジークフリート・ギーディオン（1941 年の書）であつた。しかしゼーヴィのものは空間を客体的素材とする素朴な段階に留まっており、ギーディオンの空間概念は厳密な学的検討を経ないままの粗雑なものであつた。これらは建築という概念（既成概念）再検討にかかわるかたちで出てきた 20 世紀前半の空間論の代表的なふたつである。かれらの後に、建築することにかかわり根本的に空間概念を反省、制作しようとする者のなかに、一切の概念的加工以前の空間経験へ接近しようとする者たちもあらわれてきた。建築することのぎりぎりの地平内へと思索を拡張し深め、すくなくとも根本的に空間が問題にされるべき領野（ここで言う生活世界）を視野に収めてのうえでなければ建築空間についての思索＝制作は始められない、という姿をもつ者たちがあらわれてきたのである。そうしたなかで、空間経験が主題化される一般的な事情を 20 世紀初頭以降の哲学・思想に見て、その哲学・思想を基盤とする建築空間論へと建築的思索を進めることが構想されることになる。その流れを自らの内に受けとめている制作者＝生活空間設計者のうちには建築家スティーヴン・ホール等がおり、これまで、ホールをまず研究対象としてとりあげ、また我が国の建築家増田友也をとりあげてきている。本研究期間内に、主に小野の先行研究成果にもとづき、深められた建築することについての思索をくりかえしていた増田等の建築家の思索のさらなる解明へ、その背景潮流研究とともに、研究展開できればと考えている。本研究の展開の公開によって、現代行なわれようとしている建築することにおいて、個別の制作者ごとに、より善きインスピレーションを喚起できるであろうことが、意義である。同時に本研究の展開の公開を通して、制作品とともに生きる人びとに、かれらが 20 世紀初頭以降の哲学・思想の謂う生活世界をときに開きやすく、感得しやすくすることが、意義である。

#### 2. 研究経過等

2010 年度単年度のみの申請である。2010 年 9 月 10 日に日本建築学会大会（北陸；富山大学）において「増田友也の建築思想 ―生活世界への還帰―の発端」（『梗概集』F-2、建築歴史・意匠、791-792 頁）と題して本研究発表としての学術講演を行ない、また論文「Todas の建築についての思索にみられる増田友也の成熟」（『日本建築学会中国支部研究報告集』第 34 巻、2011 年 3 月、CD-ROM 版論文番号 929 号、865-868 頁）を執筆するとともに、2011 年 3 月 6 日に日本建築学会中国支部研究発表会（徳山工業高等専門学校）において同論文内容に関する研究発表を行なった。これが最新の研究概況である。

## 〔共同研究〕

低体重および過体重学生の体格改善における栄養・食事指導の効果

生活科学部管理栄養学科 准教授 下岡 里英

### 1. 研究目的と意義

本調査研究では、低体重（BMI<18.5）および過体重（BMI≥25）の女子大生を対象とし、6カ月にわたり、定期的な栄養教育の介入を行うことを目的とする。継続的な身体計測と栄養教育を行うことにより、対象者自身が健康上の問題点を理解し、現在および将来において健康な女性を目指した適切な体重管理を行うスキルを身につけさせることを目的とする。また、栄養指導と同時にストレス指標も検討し、指導期間のストレス状況の把握も目的とする。

### 2. 研究方法

- 1) 2010年4月の健康診断時に食生活アンケート調査（内容は2009年度に準ずる）を全学生対象に行い、全学的な食生活状況の把握を行う。
- 2) 2009年度と同様に、主に1年生を対象として、1)に示した健康診断の結果からBMIが18.5未満あるいは25以上であり、栄養指導への参加を希望した学生を対象として、概ね6カ月を目途とした継続的指導を行う。指導時には、身体計測等も行うこととする。

### 3. 研究経過

- 1) 2010年4月実施の健康診断の結果、受診学生1729名の内、BMI25以上の者が113名（6.5%）、BMI18.5未満の者が184名（10.6%）であり、2009年度と比較してそれぞれの比率が上昇しており、やはり、栄養・食事指導の必要性が強く示唆された。この受診学生に対して、食生活アンケートを実施した（有効回答1238名）。まず、朝食欠食についてみると、一人暮らしの学生の欠食率が36%であり、実家暮らしの学生（19%）に比べ高値であった。欠食の理由は両群ともに、「時間がない」が一番多く、次いで「面倒くさい」、「食欲がない」という理由が挙げられた。その内、一人暮らしでは、「面倒くさい」という回答の方が「食欲がない」という回答より多くみられた。また、野菜摂取量についても一人暮らしの学生の方が少ないという結果になった。この差は、若年女性における自己の健康管理能力の未熟さを浮き彫りにする結果であると考えられる。それ以外の調査項目については、一人暮らしの者と実家暮らしの者との間に明らかな違いはみられなかった。
- 2) BMIによる評価で過体重あるいは低体重に該当した者の内、面談による個別指導を行った者は45名であった。個別指導では、過体重あるいは低体重による身体への影響について話し食生活の問題点の指摘等を行った。さらに、個別指導を行った45名の内、31名が継続的な個別指導に参加し、複数回指導ができた者が20名であった。継続指導対象者それぞれに対して、食事調査等を随時行い、食生活を評価し指導した結果、低体重者（13名）においては、体重を維持した者あるいはやや体重が増加した者が多く、体重が減少した者は1名のみであった。過体重者（7名）については、明らかな体重減

少があった者は1名のみであり、ほとんどが横ばいであった。しかし、食事内容の改善がみられた者や改善の意識がみられた者もあり、栄養指導の効果と考える。ストレス指標としてのカテコールアミン排泄量については、2009年同様、体格による違いや指導による明らかな影響はみられなかった。

## 〔基盤研究〕

### 食を通じた精神活動制御の試み

生活科学部 管理栄養学科 教授 瀬山 一正

現代食は、炭水化物として精製した穀類と精製した蔗糖と更に植物油や動物性の中性脂肪がエネルギー源の 30-40%を占めている。これらの物質は代謝された後に水と炭酸ガスになる。従って、緩衝能力を備えた物質の体内生成量が生成される酸の量に対して相対的に少ない状態になっている。このため、現代人は慢性的な酸症状態に置かれていると推測されている。実際に尿の pH を測定してみると明らかに酸性で、これは体内で生成された酸が尿の持つ緩衝物質質量を超えて分泌されていることを示している。この状態は 500 万年に及ぶ人類の進化過程の中で農耕文化以来(2 万年前) 極く最近生じたことで、特に産業革命後の 200 年間の食における変化の影響が大きい。それ以前の古代人の食を研究した報告によると古代人の尿はアルカリ性であったことを明らかにしている。現代人の慢性的な酸症状態は進化から獲得された体内環境の生理的状态から逸脱しているため、この状態は視床下部によってストレスとして受容されていると考えられる。このストレス状態によって予見される体の反応がどのようなものなのかを見つけ出し、精神・身体活動への影響を最小限に抑制する手段を探るのがこの研究の目的であった。

この過程で我々は、酸性食摂取時にアルカリ性食摂取時と比較して尿酸排泄が増えることを見出した。現在高尿酸血症は増加し 10 年前と比較すれば 3 倍に増え、痛風を始め慢性腎症、糖尿病などの生活習慣病の原因要素の一つであるといわれる。尿 pH 6 から 6.5 への僅かな変化により尿酸排泄量は 50%以上増える。食材の選択でこのような改善が見られることは、臨床医学的意味合いは大きく具体的に食を通じた介入によって予防・治療の可能性を世界で始めて提示したことになる。進化の過程で尿酸分解酵素の活性を失ったのは、人を始めとした高等猿のみで、これによる利点は活性酸素種を結合により中和し遺伝子やタンパク質の損傷を防ぐことによって癌の発症を抑制し長寿を達成していることと、神経系の刺激作用により中枢神経系中でも脳の発達が促されたことである。尿酸排泄が困難になっている現代人の状態は、食の変化により齎された慢性的な酸症状態の身体活動への影響の一端と考えられる。本来アルカリ性であった尿が酸性化したことが尿酸の排泄を難しくし高尿酸血症を現出しているといえる。

ストレス状態の影響を調べているもう一つ課題である食によるストレスが神経系・内分泌系に如何なる影響を及ぼしているかの問題は、交感神経活性化状態の把握が十分で無く結論を出すに到っていない。引き続きカテコールアミン量の尿中排泄量の測定を一日量全体を追跡することで解決を目指している。これによって現代食の抱える問題を解決し健康寿命の延長に資していきたい。

業績

論文 1) Urine alkalization facilitates uric acid excretion. A.Knabara, M.Hakoda



&I.Seyama. Nutrition Journal 9:45 (2010). 2) 尿アルカリ化による尿中尿酸排泄量の増加の栄養学的意義。神原彩、瀬山一正 論集 60 : 141-149 (2010)  
学会発表 14th Int. Symp. on Purine and Pyrimidine Met. in Man(2010). P008 Effect of change in urine pH by manipulating food materials on urinary acid excretion. I. Seyama &A.Kanbara.

〔学術図書出版〕

森 斌著

## 『万葉集歌人大伴家持の表現』

（溪水社 2010年9月発行）

大伴家持は、花鳥風月、あるいは雪月花といった風流に優れた作品を万葉集に残している。そこで、風流歌人として第一章は、花鳥風天として、花鳥風と月に替わって七夕歌を天と象徴させて、それらを対象に研究成果をまとめた。第二章は、風土論として山と川に注目してとくに越中の風土を研究した。第三章は、人との別れということを愛別離苦として分析を試みた。大伴家持は、風流の孤愁歌人であることを証明する内容になっている。目次については以下に記した。なお著書は、A5版300頁、定価4,500円である。

### 目 次

#### 第一章 風流—花鳥風星—

##### 序節

##### 第一節 花香の歌

- 一 香・薫・芳・馥
- 二 にほふ
- 三 たちばな
- 四 ふぢ
- 五 あしび
- 六 花香の庭
- 結 び

##### 第二節 ホトトギスの歌

- 一 ホトトギス歌
- 二 習作時代
- 三 亡弟
- 四 亡妾挽歌の影響
- 五 鄙と都
- 結 び

##### 第三節 風の歌

- 一 習作時代
- 二 越中時代
- 三 少納言時代
- 結 び

##### 第四節 七夕歌

- 一 天平十年（二十一歳）
- 二 天平勝宝元年（三十二歳）
- 三 天平勝宝二年（三十三歳）
- 四 天平勝宝六年（三十七歳）
- 五 家持と七夕歌
- 結 び

## 第二章 越中―山川異域―

### 序節

#### 第一節 越中国守

- 一 赴任
- 二 宴席
- 三 越中詩歌
- 四 帰任
- 結 び

#### 第二節 山川異域

- 一 「山の歌」と「川の歌」
- 二 習作時代（十五歳から二十九歳）
- 三 越中風土（二十九歳から三十四歳）
- 四 越中の山
- 五 越中の川
- 結 び

#### 第三節 立山賦

- 一 家持立山賦
- 二 池主立山賦
- 三 万葉五賦
- 四 伝統の庶幾
- 結 び

#### 第四節 天平二十年出挙の諸郡巡行

- 一 越中の出挙
- 二 能登の出挙
- 三 望郷歌
- 結 び

## 第三章 別離―愛別離苦

### 序節

#### 第一節 亡妾挽歌

- 一 悲傷の歌群（四六二から四六四）

二 悲嘆の歌群（四六五から四六九）

三 悲諸の歌群（四七〇から四七四）

四 亡妾挽歌の影響

結 び

第二節 防人の心情を述べる長歌三首

一 悲別の対象

二 「東をのこ・東をとこ」の「妻別れ」

三 防人の悲別

四 「うつせみの世の人」

結 び

参考

万葉の雪

万葉の月

万葉の鶯

家持の植物歌

家持の山と川の句

引用和歌索引

あとがき

## IV. 2010 年度広島女学院大学学術研究助成 特別助成報告

### 学会特別助成

末永 航 生活デザイン・情報学科 教授

日本アニメーション学会第 12 回大会 6/26-27

### 学術研究特別助成

1. 橋本 一夫 生活デザイン・情報学科 教授

ON VON NEUMANN - JORDAN CONSTANTS

Journal of the Australian Mathematical Society, Volume 87, Issue 03,

December 2009, pp.371-375

2. 宮本 陽子 人間・社会文化学(※) 教授

引き裂かれる近代—古いものと新しいもののあいだで ; 「たけくらべ」に  
見るこどもたちの近代

危機のなかの文学 水声社 2010 年 6 月 pp.253-271

※ 2011 年 4 月より日本語日本文学科所属

# V. 2009 年度広島女学院大学学術研究助成

## 【研究成果報告】

### 〔個人研究〕

・山下 京子      テーマ      特別なニーズを持つ大学生女子の支援のあり方

#### 成 果      1)学会誌等

山下 京子 「注意欠陥多動性障害(ADHD)研究の最近の動向について」  
『広島女学院大学論集』第59集、2009年12月、pp.1～16

・小野 育雄      テーマ      現代建築家の制作にみえる生活世界のつきつめ方についての研究

#### 成 果      1)学会誌等

小野 育雄 「生活世界のつきつめ方—建築家 増田友也の場合」『広島女  
学院大学論集』第60集、2010年12月、pp.79-93

#### 2)口頭発表

小野 育雄 「建築することの二相」日本建築学会 2009 年度大会（東  
北）学術講演、2009年8月27日 東北学院大学

・木本 浩一      テーマ      中国における木材流通構造の変容に関する地理学的研究

#### 成 果      1)学会誌等

木本 浩一、谷人 旭（華東師範大学）  
「中国における木材加工流通業の地域的展開—上海地域を  
事例として—」、『経済地理学年報』第56巻1号、2010年3  
月、p.45

### 〔基盤研究〕

・中田 美喜子      テーマ      e—ラーニングによる生涯学習の試み—高齢者向け教材の開発—

#### 成 果      1) 学会誌等

中田 美喜子 「Web とブログを用いた遠隔教育—再履修クラス開講  
について—」『広島女学院大学論集』第57集、2007年  
12月、pp.61-67

中田 美喜子 「インターネットを利用した遠隔教育—技術的進歩と受講者の意識について—」『広島女学院大学論集』第 58 集、2008 年 12 月、pp. 153-164

2) 口頭発表

中田 美喜子 「インターネットを利用した再履修学生のサポート—Web, ブログ, メールを用いた遠隔教育—」平成 19 年度大学教育・情報戦略大会 (社団法人 私立大学情報教育協会)、2007 年 9 月

中田 美喜子 「遠隔教育による開講講義について—ブログと Web を用いて—」平成 19 年度情報処理教育研究集会 (文部科学省)、2007 年 11 月

・山本 武史      テーマ      粒子音韻論の拡張による母音体系の分析

成 果      1) 学会誌等

山本 武史 “A Cluster Analysis of the German Vowel System”『広島女学院大学 英語英米文学研究』16、2008 年 3 月、pp. 56-76

山本 武史 「一般米語における母音体系のクラスター分析と音声教育への応用」『音声研究』15-1、2011 年 4 月

2) 口頭発表

山本 武史 「セグメントの音韻論—母音体系と音節量についての再考」『日本英文学会第 83 回大会シンポジウム：英語音韻論についていま何が言えるか』2011 年 5 月 21 日 北九州市立大学北方キャンパス

・坂井 堅太郎      テーマ      食物アレルギーに対する経口免疫寛容に影響を及ぼす栄養状態とストレスに関する研究

成 果      1) 学会誌等

坂井 堅太郎、高松 寛子、山内 真知子、美野 祐里佳、松村 愛子、水羽 陽子

「食物アレルギーに対する経口免疫寛容に及ぼす軽度ストレスの影響」『広島女学院大学論集』59 集、2009 年 12 月 pp. 75-85

成 果    1) 学会誌等

中村 浩一郎    「Japanese direct object scrambling in double object constructions is an overt QR」『Proceedings of the Thirtieth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society』2006 年 6 月、pp. 347-357、関西言語学会

中村 浩一郎    「Quantifier scope, P feature, and interface economy」『Proceedings of 5<sup>th</sup> Hawaii International Conference on Arts and Humanities』2007 年 1 月、pp. 3625-3635、Hawaii International Conference on Arts and Humanities

中村 浩一郎    「Long distance scrambling as a focus movement」『Journal of English Linguistic Society of Japan (JELS) 24 号』2007 年 3 月、pp. 161-170、日本英語学会

中村 浩一郎    「The internal structure of quantified phrases, focus reading, and scrambling in Japanese」『日本語学会第 135 回大会予稿集』2007 年 11 月 20 日、pp. 154-159、日本語学会発行

中村 浩一郎    「Topic-focus articulation and scrambling as a focus movement in Japanese」『Proceedings of the thirty-ninth Western Conference On Linguistics』2009 年 7 月、pp. 231-240、Department of Linguistics, University of California, Davis

中村 浩一郎    「Japanese object scrambling as an exhaustive identificational focus movement」『Proceedings of the 11<sup>th</sup> Seoul International Conference on Generative Grammar: Visions of the Minimalist Program』2009 年 8 月、pp. 273-290、Hankuk Publishing Co.



2) 口頭発表

中村 浩一郎 「Long distance scrambling as a focus movement」  
日本英語学会第 24 回大会 2006 年 11 月、東京大学

中村 浩一郎 「Quantifier scope, P feature, and interface economy」  
*5<sup>th</sup> Hawaii International Conference on Arts and  
Humanities* 2007 年 1 月、Marriott Hotel Resort and  
Spa, Honolulu, HI, USA.

中村 浩一郎 「The internal structure of quantified phrases, focus  
reading, and scrambling in Japanese」 日本言語学会  
第 135 回大会 (英語での発表) 2007 年 11 月、信州大学

中村 浩一郎 「Topic-focus articulation in Japanese」 福岡言語学会 4  
月例会 2008 年 4 月、九州大学

中村 浩一郎 「Topic-focus articulation and scrambling as a focus  
movement in Japanese」 39th Western Conference  
On Linguistics (WECOL) 2008 年 11 月、University of  
California, Davis. Davis, CA, USA.

中村 浩一郎 「Topic-focus interpretation, syntactic structure, and  
scrambling in Japanese」 Information Structure  
between Linguistics and Psycholinguistics 2009 年 3  
月、Katholic University Leuven, Leuven, Belgium.

## VI. 特別専任研究員の活動報告

谷岡 知美

### 1. 学習支援

2010年4月より広島女学院大学図書館で、「ラーニング・コモンズ」(Learning Commons)という名称のもと、新しい知のコミュニケーション広場として機能するいくつかの取り組みが行なわれ、特別専任研究員として業務に携わった。「ラーニング・コモンズ」には、本学の“HJU”をキーワードに、“H”は「ハートフル・コモンズ」(Heartful Commons)として1階の旧新聞閲覧室にソファ、パソコンを配置し、くつろぎの空間をつくり、移動可能な机と椅子を置いた1階自習室を“J”の「ジョイフル・コモンズ」(Joyful Commons)と名付け、1階の自由パソコン・コーナーを“U”の「ユースフル・コモンズ」(Useful Commons)と呼び、そこに本学学習支援室を置いた。「ユースフル・コモンズ」には、学習相談に対応できるラーニング・アドバイザー(Learning Adviser)が常駐し、学生のパソコンに関する相談だけでなく、大学生活における様々な問題の解決を支援できる体制を整える試みを行った。ラーニング・アドバイザーは、①英米言語文化学科卒、②日本語日本文学科卒、③管理栄養学科卒、と学生のあらゆるニーズに応えることができるよう、多種の専門を持つメンバーで構成された。ラーニング・アドバイザーの日常業務は、A. 学生の学習支援、B. パソコンやプリンターの管理、C. 図書館の補助作業の3項目に大別される。本稿では、初年度である2010年度の学習支援室の利用状況を報告し、改善点、問題点を明らかにすることで、今後求められる学習支援の理想像を考えてみたい。

#### (1)2010 年度結果報告

2010年度の学習支援室の稼働日数は、計168日(午前:179日、午後:157日、半日を0.5日と計上)であり、支援学生総数は計673名である。図書館の開閉に合わせ、平日のみの開室とし、一日を午前の部(9:00-11:30)と午後の部(12:30-19:00、30分の休憩を含む)に分け、午前と午後でそれぞれ分野の異なるラーニング・アドバイザーが待機した。ラーニング・アドバイザーは、学生支援を行うごとに「学習支援報告書」を総合研究所所長、総合研究所事務課長へ提出する。学習支援を希望する学生は、図書館のホーム・ページからの予約、もしくは予約がなければ当日申し込むことができる。以下に、月別学習支援利用者数の表を挙げる。

	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	年間計
人数	34	71	111	188	21	50	58	64	38	38	673
グループ	17	32	63	97	20	46	47	62	35	25	444
報告書	17 件	32 件	63 件	97 件	20 件	46 件	47 件	62 件	35 件	25 件	444 件

\* 9 月には 8 月分を含む。

\* 夏期休暇（8 月～9 月 20 日）、春期休暇（2 月 11 日～3 月 31 日、統計は 2 月 28 日締め）は午前中のみ開室。

#### 図 2010 年度学習支援室月別利用者数

1 回の支援に対し、学生の人数は制限しない。ラーニング・アドバイザーは、支援 1 回につき、1 件の報告書を提出する。報告書の件数と支援グループ数は一致する。この統計から、前期試験のある 7 月が学生数 188 人、報告書 97 件と最も多いことがわかる。ついで前月の 6 月が多い。これは、管理栄養士の国家試験対策を求めた学生が、最大 1 グループ 8 人であり、繰り返しの利用があったことが理由である。夏期休暇後は、卒業論文提出締め切り月の 12 月が学生数 64 人、報告書 62 件と後期では最も多い。続いて、後期試験前月の 1 月が学生数 38 人、報告書 35 件と多い。

また、支援内容に関しては、①卒論について（106 件）、②管理栄養士国家試験対策（58 件）、③英検対策（53 件）、④「アドヴァンスド・リーディング」の課題について（22 件）、⑤教職について（17 件）が上位 5 項目である。このように、支援内容と月別利用学生者数の推移は比例している。

#### (2)2011 年度の目標と提案

2011 年度は、さらに多くの学生の利用を目指す取り組みを行いたい。4 月、5 月の利用者数が示すように、2010 年度は図書館での学習支援室設置が初年度であったため、学内での認知度が低かった。年度末になるにつれ、学生の間で口コミで広がった印象が残り、まだ支援室の存在を知らない学生がいる可能性がある。この点を改良するため、今後も告知方法として、図書館ニュース、リーフレットの作成、ポスターの掲示、インターネットの学生掲示板での案内、初年度の学生オリエンテーションでのアナウンス等を引き続き行い、学内での認知度を高めたい。

また、支援学生の内訳として、①英米言語文化学科 278 人、②管理栄養学科 247 人、③日本語日本文学科 81 人、④生活デザイン・情報学科 34 人、⑤幼児教育心理学科 30 人、と所属学科に偏りがある。これは、上記の認知度の問題とも関係するが、2011 年度は全学科の学生に告知し、それぞれの学生の持つ問題の解決に手助けができるよう、全学科の専門に対応できるラーニング・アドバイザーを配置することが望ましい。そして、ラーニング・コモンズの掲げる「学びの力」を養う役割の一端を担い、今後も学習支援室が組織として機能し、大学のあり方や学生のニーズに合わせてさらに展開していくことを期待する。

## 2. 研究概要と研究成果

### (1) 研究テーマ:『ビート世代ービート詩人アレン・ギンズバーグを中心にー』への取り組み

稿者は、総合研究所特別専任研究員在職中の2009年4月1日より2011年3月31日まで、『ビート世代ービート詩人アレン・ギンズバーグを中心にー』(The Beat Generation: Allen Ginsberg as a Beat Poet)、という題目を掲げ研究を進めた。その目的は、ギンズバーグ(Allen Ginsberg, 1926-97)の作品解釈を軸に、「ビート世代」(the Beat Generation, the Beats)の文学、文化の特質を究明することである。

2010年度の主な取り組みは、2008年3月に提出した博士論文、『ビート詩人ギンズバーグ』の図書出版の準備である。必要な加筆、修正を加え、2011年4月に株式会社英宝社から出版予定である。また、ギンズバーグの「カディッシュ」(“Kaddish,” 1962)に再度注目し、エレジーである本作品を、預言書として論じる試みを行った。その際、ギンズバーグ自身が多大な影響を受けたという英国の詩人、ウィリアム・ブレイク(William Blake, 1757-1827)を調査し、いかにブレイクの預言者的詩人の態度が「カディッシュ」に現われているか、ということを検討した。今後の課題としては、他のビート世代の作家たち、特にジャック・ケルアック(Jack Kerouac, 1922-69)による文学作品との関連性の解明である。本年度はギンズバーグに加え、ケルアックの文献収集も行った。他のビート作家と比較することで、現在多種にわたる「ビート世代」の定義の解決に向け、ギンズバーグの与えた影響、果たした役割を明示したい。

### (2) 2010年度の研究業績

#### ○ 著書

『アレン・ギンズバーガーカウンターカルチャーのビート詩人ー』東京：英宝社、2011年4月発行予定。

#### ○ 論文

“Energy of Vortex in Ginsberg’s *The Fall of America*” 『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第14号、2011年3月発行。

#### ○ 口頭発表(学会)

「「カディッシュ」における「死」の預言性」、日本英文学会中国四国支部第63回大会(於：四国大学)、2010年10月30日。

## Ⅶ. 2010 年度広島女学院大学学術研究助成

### 【交付一覧】

研究代表者 (所属学部)	研究種目	研究課題名または書目	交付年度(研究期間)	備考
山内 理恵 (文学部)	個人研究	D.H.ロレンスから見たブロンテ姉妹 —エミリを中心に—	2010(2010～2011)	新規
篠原 収 (生活科学部)	個人研究	日系グローバル企業におけるダイバーシティ・マネジメント	2010(2010～2011)	新規
中村 浩一郎 (文学部)	個人研究	スクランプリング・フォーカス・トピックに関する通言 語的統語的研究	2010(2010～2011)	新規
中田 美喜子 (生活科学部)	個人研究	広島県備北地区における高大連携遠隔講義—遠 隔講義受講者の意識調査および生涯学習への応 用について—	2010(2010～2011)	新規
田中 沙織 (文学部)	個人研究	幼児と保護者における身体活動量の関連性—幼 児の身体活動向上のための支援へ向けて—	2010(2010～2011)	新規
石井 三恵 (生活科学部)	個人研究	意思決定のためのコミュニケーション —フィンランド女性の社会参画を中心として—	2010(2009～2010)	継続
Ronald D. Klein(文学部)	個人研究	明治期の日本について〈書く〉女性達	2010(2009～2010)	継続
大場 美和子 (文学部)	個人研究	テレビニュースと取材の談話の構造の比較分析	2010(2009～2010)	継続
檜崎 久美子 (生活科学部)	個人研究	伝統的装束の使用実態から見る意義と伝承に関 する研究	2010(2009～2010)	継続
三樹 正典 (文学部)	個人研究	幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的効 果について	2010(2009～2010)	継続
宮本 陽子 (文学部)	個人研究	メロドラマが育てた近代国民国家日本(新聞小説 作家としての紅葉から漱石まで)	2010(2009～2010)	継続
小野 育雄 (生活科学部)	共同研究	建築家の思索にみる生活世界のつきつめ方	2010(2011)	新規
下岡 里英 (生活科学部)	共同研究	低体重および過体重学生の体格改善における栄 養・食事指導の効果	2010(2009～2010)	継続
瀬山 一正 (生活科学部)	基盤研究	食品選択による精神活動制御の試み	2010(2007～2010)	継続
森 斌 (文学部)	学術図書出版	万葉集歌人大伴家持の表現	2010	
橋本 一夫 (文学部)	特別助成	ON VON NEUMANN-JORDAN CONSTANTS <i>Journal of the Australian Mathematical Society</i> , Volume 87, Issue 03	2010	
宮本 陽子 (文学部)	特別助成	引き裂かれる近代—古いものと新しいもののあい だで:「たけくらべ」に見るこどもたちの近代 危機のなかの文学 水声社	2010	
末永 航 (生活科学部)	学会特別助成	日本アニメーション学会第12回大会 6/26-27	2010	

## Ⅷ. 2010 年度科学研究費補助金

### 【交付一覧】

#### 1. 研究代表者への交付

研究代表者 (所属学部)	研究種目 審査区分	課題番号	研究課題名	交付年度(研究期間)		備考
				交付額 (直接経費)	交付額 (間接経費)	
木本 浩一 (文学部)	基盤研究(B) 海外	22401037	南アジアにおける「地域」ガバナンスとしての 共同森林経営に関する地理学的研究	平成22(平成22～24)		新規
				4,900,000 円	1,470,000 円	
山本 武史 (文学部)	基盤研究(C) 一般	22520514	頭子音・尾子音が音節量に与える効果に ついて	平成22(平成22～24)		新規
				700,000 円	210,000 円	
山下 京子 (文学部)	基盤研究(C) 一般	22530779	青年期女子の注意欠陥多動性障害 (ADHD)への臨床心理学的アプローチ	平成22(平成22～26)		新規
				900,000 円	270,000 円	
小林 文香 (生活科学部)	基盤研究(C) 一般	21520304	ストック型社会形成に向けた購買意識からの 脱却をめざす住情報提供に関する研究	平成22(平成21～23)		継続
				700,000 円	210,000 円	
森 あおい (文学部)	基盤研究(C) 一般	21500725	アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人の サブカルチャー	平成22(平成21～23)		継続
				800,000 円	240,000 円	
田中 秀毅 (文学部)	挑戦的萌芽研究	20652034	数量表現を伴う関係詞節の統語的・意味 的機能の研究	平成22(平成20～22)		継続
				900,000 円		

#### 2. 研究分担者への配分

研究代表者 (所属機関)	研究種目 審査区分	課題番号	研究課題名	交付年度(研究期間)		備考
				交付額 (直接経費)	交付額 (間接経費)	
氷見山 幸夫 (北海道教育大学)	基盤研究(S)	21222003	アジアにおける持続可能な土地利用の 形成に向けて	平成22(平成21～22)		新規
				13,700,000 円	4,110,000 円	

研究分担者(所属学部): 木本浩一(文学部)

配分額(うち間接経費): 1,000,000 円(30,000 円)

研究代表者 (所属機関)	研究種目 審査区分	課題番号	研究課題名	交付年度(研究期間)		備考
				交付額 (直接経費)	交付額 (間接経費)	
妹尾 理子 (香川大学)	基盤研究(C) 一般	20405096	共生・共同の住まい方・住環境づくりのため のリテラシー育成手法に関する研究	平成22(平成21～23)		継続
				1,000,000 円	300,000 円	

研究分担者(所属学部): 小林文香(生活科学部)

配分額(うち間接経費): 100,000 円(30,000 円)